新東京繁昌記

國民新聞社長
德富蘇峰先生序
牧野元次郎著

第二版改訂
東京
新橋堂

268
39

序

雄健強大なる國民は、亦た勤儉にして、貯蓄心に饒めること、英國然り、佛國然り、獨逸亦た然り。

蓋し競爭は、現今世界の大勢なり。苟くも、此間に立ちて、雄を列國と競はんとするものは、其の何れの邦國たるを問はず、先づ國力の充實を圖らざるものはあらず、何となれば、今日列國の競爭は、實力の競爭なり、赤手空拳を以てしては、單に競爭場裡の勝利者たる能はざるのみならず、殆んど一國として、其の存在をすら保つこと難ければなり。

特28
581

雄健強大なる國民は、亦た勤儉にして、貯蓄心に饒める國民なり。英國然り、佛國然り、獨逸亦た然り。

蓋し競爭は、現今世界の大勢なり。苟くも、此間に立て、雄を列國と競はんとするものは、其の何れの邦國たるを問はず、先づ國力の充實を圖らざるものはあらず、何となれば、今日列國の競爭は、實力の競爭なり、赤手空拳を以てしては、單に競爭場裡の勝利者たる能はざるのみならず、殆んと一國として、其の存在をすら保つこと難けれはなり。

明治
(1)44. 6. 10

國民の活動は、國力の充實に俟たざる可らず。而して勤儉貯蓄は、國力充實の唯一の條件とはいふ能はざるも、其の主要なる一條件たり。何となれば、國力の充實は、畢竟するに、國民各個の實力の充實に外ならざればなり、而して箇人の實力は、勤儉貯蓄によりて培養せらるゝこと決して尠少に非らざればなり、夫れ既に然りとせば、我が國民に向つて、勤儉貯蓄を奬勵するは、今日の急務に非らずして何ぞや。

勤儉ならずんば、貯蓄すること能はず。然かも、貯蓄心無け

れば、勤儉なる能はず、否な貯蓄心無き勤儉は、其實勤儉ならざるに均し。所謂宵越の金を使はずといふが如きは、如何にも金錢に淡白なる、江戸兒の意氣を見るべしと雖も、然かも、之れ雄健强大なる國民の氣象とはいふ可らざるなり。夫れ遠慮なくんば、近憂あり。若し我が國民にして、其の富强を將來に期せんと欲せば、宜しく今日に於て、勤儉貯蓄の精神を養成し、其の實力增進に努むる所無かる可らず。

頃日牧野元次郎氏、『金』と題する小册子を刊行せんとし

て、予に來りて一言を題せんことを求むるあり、乃ち卑見を開陳して以て序文に代ふと云爾。

明治三十四年七月十三日

國民新聞社に於て

徳富猪一郎

序

古も今も、老も幼も、黄色人も白皙人も、凡そ人として此世に生存する者は、唯だ此金と云ふものゝ爲に苦勞せざる者は殆ど稀なり、生命の次は金、時に或は、金の次に生命の來ることもあり、朝な夕な、唯だ之が爲に心配して、曾て心を安んぜず、寸時も金なるものゝ志想を解脱することは能はざるなり、人事に夫れ程必要なる金、重寶がらるゝ金、誰にもすかるゝ金、此金に對して世人の有する智識の程度いかんと顧みれば、存外其考の低きも

目次

第一　金の性質

金とは何に？　金は萬能の神なり　人は皆金の神の信者なり　郷に入りては郷に從へ　拜金宗の本義を解せよ　守錢奴　紀文大盡　金の勢力　人多くは金の奴隷なり

第二　金に對する人の覺悟

經濟的に金を集むること　集め得たる其金に執着すべからざる事　經濟的と慈悲的とに散金すべき事

第三　金儲の秘訣

身體をして健康ならしむること　世間を廣く見ること　社會的智識を多く蔵蓄すること　時間と勞力とを空費せざること　何事も無益に費すこと勿れ　收支を明かにすべし　克己の精神と正整の習慣とを持續すべし　金錢の漏口を堅く防げ　仕拂を速かにせよ　小は大の積と知らざるべからず　決して急ぐ勿れ　忍耐と勉強とは富を得るの確實安全なる方法也　相場と賭博とは斷じて爲す勿れ　金は活して使かへ　借金は多くは其身を滅す　親しき人より金

のありと思ふ、人は唯だ之を得るに熱心にして、而かも能く其性情を窮むるもの尠し、予が本篇を草する所以の者は、聊か其間の消息を傳へて金なるものゝ性質を明にし、而して其勢力と運用の方法とを考へ、併て金より生ずる千緒萬端の出來事、及び之より及ぼす社會一切の現象に就て、敢て說明と論難とを試みんとす、然りと雖も、予や極めて多忙の身構思の暇尠し、立論の精確は素より望む可らざるなり、唯だ思出づるまゝを記するのみ、其所論の粗笨にして文意の一貫せざるは素より其期する處なり、讀者豫め其意を諒してよ。

著者識

『金』

不動貯金銀行頭取
エコノミー倶楽部會頭　牧野元次郎著

第一　金の性質

金とは何に？

朝な夕な、この金の爲に苦勞する人間なれば、金とは何に？なる簡單の疑問に對しては、何人も明答を與ふるに躊躇せざるべし今試に之を學理的に説明すれば、

金とは通貨の總稱にして富財の一也

「金の性質」金とは何に？

を借る勿れ

第四　貸金法

其人を見るべし　其使途を見るべし　其擔保品を見るべし　金貸と慈善と混同する勿れ　泣言云ふ人には金を貸す勿れ　金を貸すは利息を取る爲めとのみ考ふ可らず　貸したる金は感謝を伴ふて返金せしむるを要す　金を貸す上に於ては情誼を容るゝ勿れ　高利を貪る可らず　使主は借主より利口ならざる可らず　金を貸すには其始終を考へよ　菓子折の爲に心を狂ゝる勿れ

第五　貯金法

ひせ貯金おせねばならぬか　生存競爭激甚　辛抱が足りない　石の上に三年　吾不動貯金銀行　三年貯金の計算と趣味

第六　結論

金より生ずる社會上の出來事

とも云ふべし、世人の多くは、金と富財とを混同して、金の外に富財の存することを知らず、富財は金より外になしと考ふるもの丶如し、誤れりと云ふべし、然りと雖も其誤謬は誤謬なりとして茲に擱き、予は今奇矯的に金の定義を下さんか

金は萬能の神なり

とも云はん、何を以て然か言ふと云へば、凡そ金の神の御利益を蒙むる時は、馬鹿なる人も忽ち利口となり、めし炊くお三も忽ち奥さまと變じ、種蒔く權兵衛も忽ち殿

様となる、是れ皆金の神の御威德の然らしむる處なりと云ふべし、金の力は高傑の士をして操を變ぜしむ、美人をして芋兵衛の枕に侍づかしむ、無理も通りて道理となり、地獄も金の沙汰次第、罪ある人も忽ち罪なき人となり、罪過なき善人も忽ち獄舍の人となる、あわれ、鹿も馬となる、馬も鹿となる、名譽を得るも、學者となるも、將た英雄豪傑となるも、金あらばなどて六ケ敷てとやある、文明も富强も、皆金の反射なりと知るべし、金の神の御利益も又大ならずや、萬能の神と崇むるも敢て誣言にあらざるべし

人は皆金の神の信者なり

佛教、耶蘇教も將た如何なる宗旨も、信者の多きことは金の神に及ぶものはあらず、金の神を深く信仰する人は、如何なる望も達することを得べし、國會議員などは朝飯前のこと、從五位男爵も欲するまゝ、ズツト大きく各國政府を己の借地人となすも又敢て難からず、之に反し、金の神に向つて惡口を言ふ變物は、其不幸、憫さ實に見るに忍びざるなり、胸に萬卷の書を藏むるも口に三度の食を得ず、國柄を執るの技倆あるも、村長の地位をも得

難し、清廉にして君子の行ある人も馬鹿と一概に擯斥を受けて顧みられず、錦心繡腸も包むに衣なく掩ふに屋根なし、憫れなるかな

鄉に入りては鄉に從へ

佛教の信者多き里に入りては、佛教信者となれ、耶蘇教の信者多き土地に入りては、耶蘇教信者となれ、凡そ此世は拜金宗の最も盛に行はるゝ處なれば、浮世の俗事にたづさわりて、世を送らんとする人々は、須らく熱心なる拜金宗の信者となれ、然らずんば俗人に伍して輸贏を

爭ふこと難し、然りと雖も先づ

拜金宗の本義を解せよ

金は世人の爭ふて皆大に貯へんとするもの然るに其巧拙によりて非常の差あり、其巧みなるを樂んで能く金を集る人は、能く拜金宗の本義を解するものと云ふべし、見よ、人の出來ざる事を成したる時の愉快を考へよ、何物の快樂か之に如かん、其成功したる結果を樂まずして、其成功を見るに至りたる所以を樂しめ、端艇競爭に勝負を爭ふ人は、メタルを得んと欲するにはあらずして、其

メタルを得るに至る勝利を得んと欲するにあり、得たるメタルは人に與ふるも可なり、唯其メタルを得たる勝利を樂しめ、金を集め得たる成功を樂んで、決して其得たる金に執着するなかれ、集め得たる金は人に與ふるも可なり、唯だ其集め得たる成功を喜べ、然るに世には拜金宗の本義を誤解して俗に所謂

守錢奴

なるもの多し、拜金宗の信者にして而も其賊なり、彼等は金を集め得たる勝利と成功とを樂しまずして、集りた

る金にのみ向つて樂しむものなり、金に執着して終生金の奴隷となるものなり、此輩の集めたる金を稱して死金と云ふ、世に益する處なし

紀文大盡

は拜金宗の本義を解したるものなり、其始め彼が商海に乘り出すや、毅然として事に怖れず、平然として生死の間に出入し、其間敢て私利の爲に營々たらず、掬すべき一片の義俠心、恒に能く人の出來難き事をなして巨萬の富を重ねたるもの、其勇氣と義心とは予輩の深く感ずる

處なり、彼の晩年の所行は敢て素より稱するに足らずと雖、其成功を得るを樂しみて、其金に執着せざる處は、即ち彼の人に異なる所以にして、紀文大盡の本領なりと云ふべし、予輩の感服に堪へざる所なり、彼の晩年の散金法は實に云ふに堪へたりと雖も、其金に執着せざる超凡的志想を聊か其行爲に顯したるものと云ふべし、而して彼が金を投じて人を助けたるの美擧は蓋し枚擧に遑あらず、人の敬愛を受けたるも尤もなりと云ふべし、若し夫れ予輩が彼を以て拜金宗の本義を能く解したるものなりとの斷定の當否を知らんと欲せば、讀者乞ふ彼が一生

の歴史を研究して來れ、庶幾くば予が言の至當なるを知ると同時に、又能く拜金宗の本義を解することを得んか

金の勢力

金を稱して萬能の神と云ふ、既に其勢力の偉大なるを知るに足らん、金は權利なり、生命なり、金なくんば此世に立ち難しと云ふべし、人は言ふ學者は貧困の門より出づと、何ぞ圖らん、金なくんば文明教育の一片をだに受くること能はざるなり、豈に啻だ教育のみならんや、凡ての物、凡ての事、如何に世は進歩したりとするも、如

何に世は發達したりとするも、文明の光は金なき人の頭上を照らさず、文明の恩澤は貧困者には霑はざるなり、人は言ふ醫は仁術なりと、何ぞ圖らん、金なき人の爲には少しも仁術の惠を受くること能はず、凡そ如何なる發明、如何なる進歩も、金なき人の爲には何かせん、金なくんば文明の餘澤を受くること能はざるなり、金なくんば生命を保つこと難きなり、あゝ何ぞ夫れ其勢力の偉大なるや

人多くは金の奴隷なり

金の勢力偉大にして、人は皆其前に低頭平身す、金の頤指に從ひて東奔西走又辭せざるなり、若し夫れ金の頤指に從はず、亭々として天に嘯くものありとせば、我れ其少くも狂人にあらずんば偉人たるを認む、偉人や世に甚だ稀なり、唯だ似て而して非なるの偉人は予輩屢々之を認むるも、其心事は一段陋しむべきものありて存す、あ蛆蟲に等しきこの人間、金に向つて色氣を有せざるもの尠きは怪しむを要せざる也

第二　金に對する人の覺悟

人間萬事金の世の中、浮世の義理としても金に緣を斷つこと難し、斷つこと能はざる此金に向つて、人の知るべき覺悟の要點を擧ぐれば左の如し

一、**經濟的に金を集むること**

二、**集め得たる其金に執着すべからざること**

三、**ただ其成功を樂しむこと**

四、**經濟的と慈惠的とに散金すべきこと**

經濟的に金を集むることは、夫の吝嗇家の貯金とは異なり、人の盡すべき義務は盡し、人の濺ぐべき涙は灑ぎ、正理正道を蹈みて我慾を張らず、凡そ人として享くべき

相當の娯樂は敢て求めて人後に立たず、悠々其所を樂しみて徒らに心を苦しましめず、而して唯だ人に勝れたる才力と忍耐とを以て、至然に來るの富を受くべし、夫の營々として、金の外に何の趣味だも解せず、人並外れて粗衣惡食し、目には一點の涙をも湛へず、爪に火を點して金を集め、以て樂しみとなすものは、其心事の陋劣なる言ふに堪へんや、畢竟此輩は天地の大と至然の美とを解せざるなり、人間の一生朝露と壽を同ふするを知らざるなり、憫むべし。

人は皆汲々として集金に勤む、良し我れ先づ其目的を達

して澤山の金を儲け得たりとせば、人に勝れたる其才智と伎倆とを喜ぶべし、而して其成功を樂しめ！決して集め得たる其金に執着すべからず、集め得たる金は先づ經濟的と慈惠的とに散金すべし、其結果は積善の家に餘慶あるが如く、又至然に金の集まるを見るべし、集散常なく而して恒あり、夜盡き晝來り、晝盡き夜來るが如し、蓋し終局なしと雖も、其人は常に富の圓滿を得べし。

經濟的に散金すべし

とは俗に所謂無駄に金を費やさゞる反語なり、金を投じ

て四つ谷街道を修築したる鹽原多助の行爲の如き是なり、金を投じて不毛の野に鐵路を布設し以て物産の增進を計るが如き事是なり、金を投じてドックを修築し以て貿易の繁榮を計るが如きこと是なり、金を投じて校舍を新築し以て人才を養成するが如きこと是なり、金を投じて不毛の地を開墾し以て國益を增殖せしめんとするが如き事是なり、要するに將來の効果を目して投資するを經濟的散金法と云ふ、經濟的に放銀するものは其家榮へ其國强し、かの紀文大盡の吉原の大門を三たび鎖したるが如きは、實に不經濟的散金法の好箇の一標本なりと云ふべし。

慈惠的の散金

とは鰥寡孤獨の不幸者を救助するが爲に金錢を投ずるを云ふ、慈惠的事業に放銀すること是なり、若し夫れ富める人にして世にも不運の人々を憫み救ふの慈心あらば、夫の虛無黨は起らざるなり、夫の社會黨は生ぜざるなり、而して世は平靜に、四海浪穩かなるを得べし、人を救ふは人の爲ならず、つまりは我身の爲なりと知れ

第三　金儲の秘訣

何事にも上手と拙手との區別あり、其差や霄壤も啻ならざるなり、たとへば夫の圍碁にも本因坊の如き名人もあれば、また其の本因坊に正目を置き、亦た其人に正目風鈴つきにても叶はざる人もあり、其階段等級甚だ多し、さても様々の世や、かの圍碁の如き一小局面の上に於てすら、彼れ一石を置き我れ亦た一石を置くにも拘はらず、其結果に於て雲泥の相違かくの如し、圍碁既に然り、この社會に立ちて各々輸贏を爭ふもの、其巧拙豈に圍碁の

比のみならんや、舞臺は廣し、役者は多し、千變萬化、虚々實々、誠に以て好觀物ならずや。

金儲の上手なるロスチャイルドの如きありバンダービルドの如きあり、紀文大盡の如きあり、河村瑞軒の如きあり、平沼專藏、淺野總一郎の如きあり、安田善次郎、大倉喜八郎、古河市兵衛の如きあり、赤手にして皆産を興したるもの、亦た一世の人傑と云ふべし、其間豈に秘訣なからんや。

我も人も日夜金儲の爲に肝膽を擢く、人豈に拔目あらんや、然るに巨萬の富を重ぬるものもあれば、囊中無一物

の貧的もあり、共にこれ金儲の爲に心を苦しむるもの、而して其差斯の如し、其間豈に秘訣なからんや。

金儲第一の秘訣

は身體をして健康ならしむるにあり、健全の身心は金儲第一の基礎なり、昔の貧的、今の長者の、大概身體の健剛なるを見ても知るべきなり、身體健全ならざれば勇氣なし、此荒き社會に立ちて人と輸贏を爭ふこと甚だ難し、爭ふたりと雖も、毎に敗を取るは火を睹るよりも明かなり、身體の健全は心の勇剛を意味す、心勇剛ならずんば

如何にしてか此世に立たん、社會は我利々々亡者の集合體なれば、心弱くては其生命を保つだに難し、況して商戰場裡の「チャンピオン」たる事をや、

多病を誇りたる才子的時代は既に過ぎ去りて、今や實力を闘はすの時世と變じたれば最も健全の身心を有する人を要す、勇氣と忍耐と機敏とは皆健全の身體にやどるものなることを知らざる可からず。

金儲第二の秘訣

は世を廣く見ること是なり、今は昔と違ひ千里も一里の

世の中なれば、一局部にのみ眼を注ぎて大局を忘るゝことある可らず、圍碁に於ても然り、一局部の勝敗にのみ眼を曝して全局を達觀するの明なくんば、良し一局部に於ては勝利を得るも、大局に於て失敗を招くや必せり、人事また斯の如し一小天地の一瑣事に齷齪して竟に世の進運と伴はず、終生小利に勝ちて大利を博するの機會を失ふ、寧ろ憫むべし、

世は日一日と進歩して、昨日の物識りは今日の物識りならざる時勢なれば、世の進歩に遲れず、文明の新事物に遭ふて驚かず、能く其妙味を咀嚼して、其利器を利用す

ることを怠る可らず、廣く世を觀て其進運に伴ふものは、即ち金儲の上手なるものなり宇宙は大なり、天地は廣し、文運の進歩は長足なり、大局に眼を注ぎて、世界の到る處に於て闘ふも、力量に於て敢て不足なきを覺悟せよ、一地方に於ては小利を博し得るも、廣き世界に於ては輸贏をだに爭ふこと能はざるが如き人物は、今の世共に語るに足らざるなり、此輩を稱して俗に商海の不具者と云ふ、

世の進歩に遲れず、世界の到る處に於て、世界の人を相手に勝敗を爭ふものは、眞に商戰場裡の勇者なりと云ふ

べし。

金儲第三の秘訣

は社會的智識を多く藏蓄すること是なり。智識は金を生むの母なりと知るべし。あはれ、金の爲に二六時中、齷齪する我利々々連の組織に係かる。此不完全の社會に棲める人々よ。世海の荒き所は人情反覆の間にありと悟られよ。人情反覆の間に處して、泰然動かず、毅然として、其難所を切り拔けんとするには、先づ人間世界の妙じき組織と、不道理なる作用と感觸とを窮めざる可らず。人

の悲しむ心も、笑ふ心も、喜ぶ心も、一見忽ち其奥底までも會得するの神通眼なかる可らず。かの單純なる思想と一片の道理とは、屢々人情と衝突して常に失敗を招くの根本なり。書生初陣の失敗は其好標本なりと云ふべし先づ人と云ふものに就て研究せよ。彼の笑ふは心底おかしきことありて嗤ふなるか。おかしからざる事にも或る一種の野心を以て、屢々大笑するものあるを認むべし。彼の喜ぶは心から喜ばしきことありて喜ぶなるか、喜ばしからざるも外形を飾らんが爲に喜ぶものあり。彼の悲しみは果して眞實の悲しみなるか、心に喜びて世間のお

せじに悲しむものあり、其表裏の反覆は人情の常なり。之を知らずして眞面目に世事を觀察せんか、失敗續きて至らん

次に社會と云ふものに就て研究せよ、社會の進歩は複雜を意味す、進歩したる社會は複雜なる社會なり。この進歩したる、この複雜なる社會に、苟も輸贏を爭はんとする程の者は先づ社會に存する規則と、機關と、運用の方法とを知らざる可らず。然るに能く之を知るもの尠し。如何にして勝利者たることを得んや。社會の規則を知らずんば社會の人たるを得ざるなり。社會の規則を知らず

して此世に生存する人は、恰も地理不案内の地を歩行するが如く、東西南北また辨ず可らず、歸るに道なく往く に路なし、唯々岐路に彷徨するのみ、憫むべし。亦喩へて言はんか、恰も闇夜に提灯なくして路ゆくが如し、鼻摘まゝるをも知らずして手探りに歩を進めつゝある中に、溝に落ち入りて、果ては大怪我を招くが如し、愚と云ふべし。敵國と戰を始めんには、先づ敵國の人情風俗と地理とを辨へるの必要あると等しく、凡そ此世に立ちて勝敗を爭はんとする程の者は、人事に關する一般の法則を辨へて、夢々拔りある可らず。人の爲に過まられざるの

用意にして、吾人の生命財産を保護する最要の利器と云ふべし。其利や護身刀若くはピストルの比のみならんや社會に存する諸々の機關と組織と運用法とを知らざる可らざるは、社會に生存する人の何人も異議を唱へざる所なるべし。然るに存外世間は愚かなるものにして、世の進歩に伴はずして新規の事物を解得せざる人甚だ多し、社會至然の力によりて、漸く新事物を知るに至る位の處にして、進んで其由來と作用とを研究して、以て他日の計に資せんとするもの、曉天の星の如しとも言はんか。此輩の如き心得にては、世界の全局に立ちて、世界の人

と輸贏を爭ふこと抑も難し。今や遠からずして、東隣に佛人住み西隣に露人棲るの時代も來るべし、深く心せずんば蓋し千載の悔あるべし、

社會に存する諸々の機關を知らざる者は、瀛車瀛船の便を知らずして、昔の如く籠に乘りて道中をするの愚を演ずるなるべし。社會に存する諸々の組織を解せずんば、大阪に送金せんとするに、簡便の方法を知らずして、危險の思をなしながら、舊來の飛脚に托するなるべし、愚と云はざる可らず、又不可抗力の危險、即ち天災地變の萬一の禍難を防ぐに、保險の方法あるを知らずして、唯

天運に委するの馬鹿者あり、愚と云はざる可らず、
世の人よ、社會に存する諸々の機關と組織とを了解し、
且つ之を運用するの方法を熟知することを怠る可らず。
而して萬事を擧げて自働的なれ。自働は成功を意味す。
總ての成功は自働に隨伴するものなれば、其心得を以て
卒先社會の機關を運用するの慨なかる可らず。思ふに社
會に存する諸機關の組織と運用とを知らずして、毎に他
働的に動くものは常に人後に落ちて、終生浮ぶ瀨なかる
べし。此輩を稱して予輩は商海の盲目者と云ふ、非か。

金儲の秘訣

として最も大切なる事は時間と勞力とを空費せざるに在り、時間と勞力とは金錢を意味す、時間と勞力とを空費するは即ち金錢を無益に費すと同じき也、夫れ金錢を浪費するは人皆之を忌むも、時間と勞力とを空費するを以て左程に念とせざるは如何に、未だ時間と勞力とを以て金錢と同視せざるに因るか、

時間と勞力とは金錢を生むの母なり、金錢は時間と勞力との子供なり、子供を得んには先づ其母たるものを求め

ざる可からず、而して其母たる時間と勞力とには素と限りてウカ〳〵するに於ては夫れ竟に捕ふること能はざるべし、力めて之を捉らへよ

人間の一生は朝露と等し、幸にして五十の常命を保ちたりとするも、此短日月それ竟に何をかなさん、然りと雖も、事の成らざるを以て單に此短き月日の爲なりとすることなかれ、天地の長久より打算すれば人生の五十年誠に短しと云ふべし、去りながら能く記臆せよ、凡そ人の事業として何の事業か、此五十年の星霜を以てして、成就せざるものやある、若し夫れ五十年を以て事をなすに

足らずとせば、千萬年の時ありと雖も、事は竟に成らざるべし、

長命の人過去を回想せば、一生は茫として夢の如くなるべし而して夢中竟に何事をも成就せざりしことを悟るなるべし去りながら先づ試に過ぎし昔を考へ見よ、汝の一生如何に無益に費したる時間と勞力との多かりしことよ、無駄に費したる時間と勞力とは汝の一生の大半を占めたるを覺ゆるなるべし、これ卽ち汝の一生を短しと觀じたる所以にして、これ卽ち汝の一生竟に何事をも成就せざりし所以也、

試に一日の中に空費する時間の如何に多きかを計算し見よ、何人と雖も、一日五時間以上（この貴き、この大切なる一度過ぎては歸らざる此時間）を空費せざるものは稀なるべし、一日の中、無駄に費す時間が五時間位にて濟めば、先づ其人は勉強家の方なるべし、相當の食事時間、休息時間、安眠時間は敢て時間を空費したるものとは云はず、是れ生命を保の必要時間なればなり、予輩が一日の中に五時間以上の空費時間ありとなすは勞働すべき時間中に存することなるを知るべし胸に手を當てゝ先づ一日中に成したる事を考へ見よ、友人と空談の爲に費

したる時間はなきか、何の効果をも奏せざる事に費したる勞力はなきか妄想の爲に思を焦したる時間はなきか有り、大に有りしなるべし、予は今假りに、大まけにまけて、一日の無駄時間を五時間と定むれば、一年間の總無駄時間は一千八百二十五時間となる、また人生五十年間の無駄時間を計算せば、實に九萬二百五十時間となるなり、今之を日に直せば三千七百六十日と十時間之を年に直せば約十二年となる一生の空費時間も豈に大ならずや而してこの十二年は全く勞働し得べき時間なるを以て、此の時間を有効に使用せんか何事か成らざらん成功手に

唾して期すべき也、咄！咄!! 何等の横着漢ぞ、事の成らざるを以て單に短日月の爲めなりとなすことや、十二年の全き勞働時間を得んには少くも三十六年の星霜を經過せざる可らず、其所以は假りに一日の勞働時間を八時間と定めて計算したるに據る、果して然らば勉强する人は不勉强の人よりも、總じて三十六年の長命を得たると同じ勘定となる也、また快ならずや、

右の計算より推せば、人生徒らに長命のみが能にあらざる也、要は唯だ時間を空費せざるにあるのみ、人生れて一分時だも無益に費さず、能く力むるに於ては、假令ば

不幸短命にして三十年に死するとするも其成したる事業は普通五十の人の成したる事業と少しも變りある可らず、時間を無駄に費さずして有効に使用するものは、短命にして短命にあらざる也、時間を無益に費す人は、長命にして長命にあらざる也、時間を節して能く力むる人は短命なりと雖も長命を保ちたるに均しと云ふべし、

無駄に時間を費さず而して幸に五十の壽命を保ちたりとせんか、其人の成したる事業は八十六歳の壽命を保ちたる普通の人と同じかるべし、八十六歳の時間決して短しと云ふ可らず、時間と勞力とを最も有効に使用するに於

ては何事かそれ成らざらんや、
夫の早世するもの何をか悲しまん、要は唯だ時間と勞力とを無駄に費さゞるにあり、徒らに年を累ぬるのみを以て能とすべからず、幸とすべからず、榮とすべからざる也此輩の生命は、良し有形的に長命を保ちたりとするも其生命や、事業を成すの上より大觀すれば既に死したるものと云ふべし死したる心身それ世の爲に何の益する處ぞ、無駄の事に一分の時間も費すこと勿れ、無益の事に一片の勞力をも盡すこと勿れ、總じて汝が一生は、何事も有効に費すことを忘るべからず、時間と勞力とを經濟

的に費すは卽ち事業を成す所以にして金錢と幸福とは求めずして來るもの也、金儲の秘術之を措きて他にあらんや。

金儲の心得

ともなるべき他の要點を左に列擧すべし

(一)何事も無益に費すこと勿れ

(二)收支を明かにすべし

(三)克己の精神と正整の習慣とを持續すべし

(四)金錢の漏口を堅く防げ

(五)仕拂は速かにせよ
(六)小は大の積なるを知らざるべからず
(七)決して急ぐ勿れ
(八)忍耐と勉強とは富を得るの確實安全なる方法なり
(九)相場と博賭とは斷じて爲す勿れ
(十)金は活して使かへ
(十一)借金は多くは其身を滅す
(十二)親しき人より金を借る勿れ

右の各項を堅く守りて能く行ふものは福德圓滿の長者となること請合なり、左りながら人の性、多くは薄弱にして行其言と叶はず、一時は奮發して其氣になるも、直にダレて終ふは實に哀けなき至り也、

あゝ貧的！、いやだ〳〵此の境界！ドウしたら脫けられようかと云ふものあらば、我輩は勸めんとす、曰く右の各項を服膺して唯々

實踐せよ！

實踐せよ!!

實踐せよ!!!

(一) 何事も無益に費すこと勿れ

「何事も」の三字に注意せられよ、人は兎角金のみを無益に費すこと勿れと敎ゆるものゝ如くなれども、予輩は單に金のみに限らずして、一片の勞力も、一分の時間も紙の屑も、木の片も、將た又た一杯の水も併せて之を云はんとす、それ何事も無益に費すこと無くんば金持となること誠に易からずや。

(二) 收支を明かにすべし

收入と支出とを明かにし、收入の範圍内に於て支出を爲せ、闇雲にドーカなるだらう主義は最も忌むべし、月に

一圓づゝ足りなくなりても、五十年目には、元利積つて三千九百四十三圓四十五錢五厘となる、又た驚くべきにあらずや、一家の經濟などは我れ關せず焉、などゝ言はずに、入を計りて出づるを制し、安排宜しきを得るにあらずんば迚も國家の經濟などを談ずる資格は無きなり、磊落氣取は最も惡し、己も困らず、人にも迷惑を掛けず初めて以て國家の事に身を致すべし。

(三) 克己の精神と正整の習慣とを持續すべし

先づ第一に良心の命ずるまゝを直行して、情の爲め、慾の爲めに横道に入らざるやう平素心懸くること肝要なり、己を制することの難きは我人ともに認むる處、大に克己の精神を養ひて併て規律正しき習慣を作れ秩序を重んじ事物を整理するの考は一日も念頭を離るべからず、放埒は最も慎むべきことなり。

(四) 金錢の漏口は堅く防げ

おあしとは能く云ひたるものなり、此金なるものは兎角逃げたがるものなれば、其逃口は能く閉め切りて防がざ

る可らず、少しにても心に油斷あれば、水の如く雲の如く自然と漏れて無くなるものなり、御用心召され。

(五) 仕拂は速かにせよ

お金ありても仕拂の惡き人あり、これ泥棒根性のあるものと云ふべし、仕拂ふべき義務と仕拂ふべき力の存するにも拘らず仕拂を難んずるは其心憎むべし、仕拂ふべきことあらば最も速かに之を仕拂へ、信用を增すの基なり

(六) 小は大の積なるを知らざる可らず

小事と雖も事を侮る勿れ、小は卽ち大の基なり、小を愼まざる人は必ず敗る、成功決して見る可らざる也、

小なりとて之を棄つ可らず、神武天皇時代の一厘錢も若今日迄利殖するに於ては言葉を以て顯し得べからざる大金とはなるなり、萬や億や兆の桁にはあらず。

（七）決して急ぐ勿れ

緩々と怠たらず、氣永に勤めよと云ふことなり、コンナ事は誰でも知つてることなれど、實行せずんば知らざると同じ兎に角も急ぐ可らず、絶へず、怠たらず、氣永に

道中を爲せ

（八）忍耐と勉強とは富を得るの確實安全なる方法

これ當然の事にして殆んど説明の餘地だもなし、要は唯だ實踐躬行するに在り、實踐躬行甚だ難し、難しと雖も之を爲さずんば富者たるを得ず、洋の東西、時の古今を論ぜず、富者たるの秘訣は實に茲に在り、ゆめ疑ふ可らず。

（九）相場と賭博とは斷じて爲す勿れ

僥倖を當にして富を得んとするは間違なり決して得らるるものにあらざるを記憶せよ既に射倖心の存する以上は其人の運命を豫知することを得べし、曰く裏長屋の住居、垢付たる衣物、日に三度の食事も辛じて位なもの、夫の仲買を見よ、十年前も今日も格別身代に違ひはあらざるべし、

夫の賭博打を見よ、いつも質屋通ひは免れざるべし、斷乎として必ず之を爲す勿れ、此忍耐と勇氣なくば賴みにならぬ人間なるを自覺せよ

（十）金は活してつかへ

六ケ敷言へば生産的に使用する事を云ふなり、何の効果をも生ぜざるやう金を使ふを死に金使ひと云ふ、碁に譬へて言へば無駄石を打つと同じ、無駄石多ければ其碁はどれもこれも死するなり、金の使ひ道にも死活の二法あるを思ひ、深く心すべし。

（十一）借金は多くは其身を滅す

金を活して使ふ人が借金するのは、少しも差支なく反て利益のあるものなれど、活して使の腕なき者が借金する程危険なるはなし、借金の爲に竟には其身を滅すに至る、假令貸す人ありと雖も、成算なくんば決して借る可らず、貧しさの故に金を借るは卑劣なり、三度の食を二度に減ずるも決して借金すべからず、生計の不足を補ふ爲の借金は返し得るの見込あらざればなり、見込なきに借る既に人を仆すの心其奥底に在り、憎むべし。

（十二）親しき人より金を借る勿れ

金は兎角爭の種となるものなり、交誼を永く保たんとするには決して親しき人より金を借る可らず、若し返濟の出來ざる時には至然と足が遠くなり、果ては多年の情誼も茲に破るゝに至る、深く思ふべし。

第四　貸金法

考ふれば考ふる程六ケ敷ものと感ずるは金貸の法なり、譯なきことと一概に思ふ可らず

金を貸すには先づ其人を見るべし、正直なるか？勉强なるか？怜悧なるか？正直ならざれば約束の期限を守らず、

利子も納めず、元金も兎角倒され勝ち也、勉強ならざれば其人の商賣は常に不繁昌にして、貸したる金も竟には零に歸し、元も子も返し得る見込あらざるべし、怜悧ならざれば機を見るの明なく借用資本運用の道も拙かるべし、隨て豫期の收益を見ること能はず、利子も滞り勝なるを免れず、如何に正直にても、如何に勉強にても、智なき正直と勉強とは、必竟何の効果をも結ばざるべし

次に其使途を見るべし、使途正しからざれば、金を貸したる甲斐の無きのみならず、却て其人の不爲となるもの也、使用方法を明言すること能はざる人には貸すべから

ず、己の信服する能はざる仕事に投する金ならば、寧ろ斷はるべし、後日の悔なかるべし、若し賭博、或は相場に使用する金ならば、如何に立派なる擔保を以て、如何に懇請を極むるも決して耳を借す可らず、要は其使用方法の生産的なるや否やを究むるに在り

最後に其擔保品を見るべし擔保品は確實なるや否や、如何なる場合にも滅失するの恐はなきか、若しありとせば、其豫防法は備り居るや否や、いつ何時世間に出しても普通の價格に賣れ行くや否や、其邊の注意肝要なり

信用貸も又た敢て不可なりとせず、若し其人が突然死す

るも、若し其人が不幸にして火災に遭遇するも、若し其人が病氣に罹るも貸したる金の損を來さゞる決着の付きたる以上は信用貸甚だ良し、併しながら萬一の時は例外なり其場合には損を爲すも止を得ずなどとの事ならば寧ろ斷じて貸す可らず、曰く金貸と慈善とは相異なればなり、之を混同する勿れ

泣言云ふ人には決して金を貸す可らず、泣言云ふ人は意志の薄弱なるもの也、意志の薄弱なる人竟に成功なし、

コンナ人に金を貸すは恰も捐てるが如けむ、

金を貸すは利足を取る爲めとのみ考ふ可らず、貸したる

金の爲に世を益するや否やをも考ふべし世に益せざる金の貸方は決して爲すべからず

貸したる金は期日に至り借主が感謝して返し來るやうになさゞる可らず、借主を喜ばしめお蔭にて利益を得ましたと言はしむるの技倆なくんば、未だ金貸の上手と言ふ可らず

喧嘩顏にて返金せしむる貸方は甚だ拙なりと云ふべし、

畢竟利足のみを得んとするの考なればこそ然るなれ

金を貸す上に於ては決して情誼を容る可らず、情誼の爲に金を貸すならば決して利足をあてにすべからず、又返

濟期限も定む可らず、先方の返し得る時を俟つべし、時に或は其金を與ふる位の覺悟を持つを要す

高利を貪る可らず、高利を厭はず金を借る人は甚だ危險なり、他に融通のつかぬ人なり、コンナ人を相手とすべからず、力めて避くべし

金を貸す人は金を借る人より利口ならざる可らず、若し之に反する時は貸したる金は貸金にあらずして損金と化するを考へよ損金を貸金と考へをる者程憐むべき者はなし斯かる借主程憎むべき者はなし

抵當物を賣らざれば返し得る見込のなきものへは決して

貸す勿れ、他より借替ざれば返し得る見込のなきものへは決して貸す勿れ、貸せば容易に取り得らるゝものにあらず、之を無理に取らんとすれば即ち其人を殺すものなり、怨恨は貸主の一身に集りて恰も惡魔と同視され、竟には鄕黨間の共に齒するものなきに至る、要するに貸金の方法を能く領得せざればなり

金は無闇に貸す勿れ、一錢の金たりとも貸さんと欲する以上は能く其始終を考ふべし考の足らずして金を貸す以上は借りたる人は却て不幸を招き、貸したる人は竟に損失を見るなり、蓋し共倒となりて終らむのみ

其始を慎め、菓子折の爲に心を抂ぐる勿れ、心に會せざる處あれば、勇氣を奮て斷然と之を謝絶せよ、この勇氣ありて始て人は安全なるを得べし、この勇氣なき人は金を貸すことを止めよ、而して寧ろ其人に之を與ふべし、貸すと云ふも與ふると云ふも其歸する處は同一なりとせば、最初より與ふると云ふ方が先方も安心なり、當方も心持良し

貸金法に就ては前段略其の要を述べ盡せり、敢て又た多言するの要を認めず、而かも讀者は言の簡なるを以て之を忽諸に附する勿れ、幸に之を味ふに於ては眞理其中に

存すべし

第五　貯金法

貯金は富を得るの最も確實なる方法にして假令迂遠の感あるも決して之を等閑に附す可らず、而して貯金の効能は永く持續するに於て其利益の最も顯著なるものなれば其の方法を選擇するを要す、其方法としては予が考案に係る三年貯金の法に據るを以て第一と爲す、左に其大要を記述すべし

第一　三年貯金の由來

勤儉貯蓄の美風を我國人に感染躬行せしむるは刻下の急務にして、其如何なる方法が貯蓄奬勵に適當なるやは今日最も研究すべきの要務なり、予は我國人の貯蓄志想に乏しく、之を外國の例に較べて、天地の相違あるを見て、慨嘆の情禁じ難く、之が爲に幾多の月日を其研究に委ねたり、幸なるかな、予輩の苦心竟に空しからずして、茲に一の方法を案出し之れを以て自分が經營せる不動貯金銀行營業の基礎とし他に向つて貯金勸誘を開始したり、

今參考の爲めに『營業の栞』の一節を茲に掲ぐ。

『なぜ貯金をせねばならぬか』

不動貯金銀行頭取　牧野元次郎

人には不時がある、病氣、天災、死亡、斯う言ふ不時の出來がつた時他人の厄介にならず、家族を安全に養ふだけの用意が要る、給料取りは何時給料に離れるか知れぬ、又商人は何時失敗するかも知れぬ、其ういふ場合に少なくとも三年位は只居ても差支ないだけの用意が必要、又主人が亡くなつて後でも三年の用意があれば其内

には遺族の自衛も出來て來る、若し全くの不用意で一朝變に出逢つたらソレこそドーにもコーにも行けなく爲つて忽ち他人の厄介になるか、惡い淋しい心を起して自らわが身を殺すやうな悲慘の境遇に陷るのであるから一家の主人たるものは豫め不時に備へる用意が肝心亦た實に義務である

『生存競爭の激しい』

今の世の中は友人も親戚も有つたものでない、萬一の時に身を顧みて呉れるものが幾人あらうか、この場合唯一

の同情者となつて慰安を與へ急を救ふて呉れるものは諸君が耐忍と腕に依つて生み溜めた貯金の外はないのである、元來貯金は行ひ難いものでないが動もすれば怠り易く、又忘れ易いのであるから什しても强制的に實行する外はない、貯金家と散財家の比較は二と八である、散財するものが八人で貯金するものが二人、情けないではないか、八人の財布は二人の財布に集るのであるから富むものは益〳〵富む、貧は益々貧となるのである、諸君はこの貯金と散財何れの道を行かんとする、希くは前者の道を行け貯蓄も一種の習慣である、勉めて貯蓄心を養ひ

其習慣と馴致は如何なる散財家も遂ひに貯蓄家となるのである、由來日本人は歐米人に比して何事にも

『辛抱が足りない』

こは食物の關係もあらうが要するに激し易く冷め易い、一旦貯蓄の聲に感奮して貯金を開始しても繼續が出來ない、薄志弱行は吾人の通弊であるから貯蓄は什しても普通の遣り方では駄目である、其處で一度預けたら必ず豫定の期限は決して出さない、又出せないと言ふ覺悟の貯金法に限ると思つて今を去る十年前、即ち明治三十三年

九月に本行の特色

『石の上にも三年貯金

といふを案出したのである、其上强制的集金制度を設け預金者の心の箍を緩めさせないやう、油斷なく往訪集金して貯蓄熱の冷めないやうにしたのである、則ちこの三年貯金と集金制度は兩々相俟ち初めて眞の貯金が出來るのである、散る金も溜るのである

『吾が不動貯金銀行』

は實にこの三年据置貯金の元祖にして今や茲に十年の歴史と經驗を積みお蔭で無事の成長を遂げ、世の信用も日に厚く愈其名の如く不動の根底を固め、最近調査預金總額四百萬圓を超へ社會からは彼の銀行は愈々固い、勉强する銀行である、アノ貯金法でなければ金は溜らぬ、又三年据置貯金であるから他銀行の如く一時に取付られる怖れもないから銀行も預金者も安心である、其上支拂準備の設備もあり、政府には壹百萬圓に近き供託金もある外重役は何れも無限責任であるから是以上安心の銀行はないとの御稱賛を與へられるやうに成つたのは吾々經營

者として中心感謝と愉快に堪へないと同時に、未だ本行の三年貯金に御加入なき方に向つて

『切に御加入をおすゝめ』

するのである、中には三年などゝ定められては到底繼かぬとか、出來てからとか、餘つたらとか申さるゝ方もあるが是が抑もの間違で今日凡て一戸を構へた主人公は必ず月々夫れ相應の生活費を要する、其生活費に必要なる收入は必ず毎月得つゝあるに違ひない、若し得なければ生計して行けぬ道理だ、されば其主人公は後日の用意と

して自己の爲め妻子の爲め是が非でも其收入の一割は貯蓄して行かねばならぬ、愛生保險、萬一に處する爲め必ず相當の貯蓄をする義務がある續かぬ處を續けるのが辛抱、中途で氣が緩み掛け込み中止の念が萌したら所謂貯蓄の六ケ敷いのは「コ、ダナ」と奮發するがよい、出來てからとか、餘つたらとか申される方は貧鬼に尾けられて居るのである、福の神に憎まれて居るのである

『餘暇に讀まんと思ふものは遂に讀書の期なく』

『餘金を貯へんとするものは遂ひに貯蓄の期なし』

元來福の神は笑ふ門に來る、青い苦い不景氣顏の門は覗

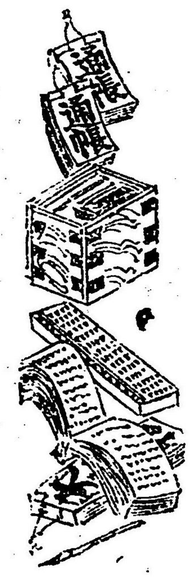
かない、人はなんでもニコ〳〵陽氣に笑ふ事が肝心だ

戊申勤儉の御詔勅にも福利を共にせよと仰せられてある、儉約も大切であるが迚去昔のやうな極端なやり方は賛成しない、旨いものも澤山喰ひ、澤山働いて貯金をせねばならぬ、往昔から大將は泣く時に笑つて士氣を皷舞した、笑へ笑へ大に笑へ、大に働き而して貯金せよ、一塊の土積りて富士の山となり、點滴の水琵琶の湖水ともなる、而してこの金の勢力の偉大なることは洋の東西、時の古今を問はないのである

されば此の勢力ある富を希ふ人よ、寸時も猶豫する勿れ

大勇猛心を振ひ起して一大決心と覺悟もて石の上にも三年貯金の眞味を味ひ齊家の基を開き福德圓滿ニコ〳〵主義の春風を家庭に迎へて花笑む如く樂しみ賜へ

貯へは人間萬事の基なり
悟りし時は明日と延ばすな



而して其所謂三年貯金の規則及月掛け方法と元利金の勘定は左の如しである

三年貯金規則

第一條　毎月一定金額ヲ三年間預ケ入ルルモノトス
第二條　滿三年目ニ別表ノ元利金ヲ拂戻ス
第三條　毎月ノ拂込ハ本行又ハ代理店ヨリ集金係ヲ差出ス
第四條　預ケ金ヲ中止シタル者ニハ滿三年目ニ其拂込元金ノミヲ返還ス
第五條　此貯金ハ中途ノ拂戻ヲ爲サス又讓渡質入ヲ禁ズ
（但火災、死亡等ノ場合ハ此限ニアラズ）

石の上（毎）三年貯（月）金（集）金

毎月預ケ入	三年目元利金
五圓二十錢	二百圓
七圓八十錢	三百圓
十圓四十錢	四百圓
十三圓	五百圓
十五圓六十錢	六百圓
二十圓八十錢	八百圓
二十六圓	千圓
五十二圓	二千圓
七十八圓	三千圓
百三十圓	五千圓
二百六十圓	壹萬圓

小を侮る勿れ、大は小の積なる實例として茲に示したきものは今三年貯金の十三圓掛けを十回繰返すと左の如き

大金となります

元金　四千六百八十圓

利子　七千八百圓

合計　一萬一千七百六十圓

最後に本行最近三年間に於ける預金の進歩を示せば左の如くである

◉本行預金の進歩

一四十一年十二月末現在

一金五拾四萬九千八百四拾六圓七拾壹錢貳厘

一四十二年十二月末現在

一金百五拾參萬壹千七百四拾圓七拾六錢六厘

一四十三年十二月末現在

一金參百拾壹萬貳千七百四拾圓五拾五錢四厘

第六　結論

あゝ金！金!! 金!!! この金の爲には、洋の東西を問はざる也、時の古今を論ぜざる也、親も子も兄弟も緣忽ち離れて他人より甚し、この金の爲には可憐の少女も哀れ鬼の食餌となりぬ、この金の爲には流石の英雄豪傑も遂に夜逃の悲劇を演じぬ、この金の爲には身を賣り節を屈する者嗚呼何ぞ枚擧に遑あらんや、此間の景狀を叙し來る

に於ては興味最も深かるべし、是等金より生ずる社會上の出來事に就ては、他日稿を改めて諸君に見ゆるの機あるべし、幸に之を諒せよ

此小册子素より見るの價値なかるべしと雖、而かも其間一片の眞理の存する處を味ふに於ては、又た聊か稗補する處なしとせんや

謹で讀者に謝す、『金』に就ては猶言はんと欲する處のも多々これあり、而かも身の多忙なる之を許さずして、茲に擱筆するの遺憾に遭ふ、諸君幸に之を恕せられよ

『金』　終

268
39

明治三十四年七月廿九日印刷
明治三十四年八月一日發行
明治四十四年五月二十五日印刷
明治四十四年六月一日再版

定價金拾八錢
郵稅金貳錢

著作者　東京市麻布區仲ノ町十六番地　牧野元次郎
發行人　東京市京橋區南金六町十五番地　松永敏太郎
印刷人　東京市芝區濱松町一丁目七番地　松本魁
印刷所　東京市京橋區宗十郎町十五番地　東京國文社
發行所　東京市京橋區南金六町十五番地　二日〈倶樂部
電話新橋三二八、三二九
振替貯金口座東京一四九四八番

不許複製

大賣捌　東京堂、東海堂、至誠堂、良明堂、北隆館、上田屋

花子孃の喜び……

（毎月一日發行　ニコ〳〵雜誌〈御禮〉）

「西有穆山師のオンニコ〳〵」

妾の……

平素に於て蟲を潰したやうな如之も怒りつぽい性質で一家のものをしオト〳〵持て餘し自然商賣も繁昌せず何時も秋の淋しいみじめな家庭でありました處がニコ〳〵雜誌を見せましたら嬉しや心機一轉とでも申べきか全く生れ代つたやうなニコやかな圓滿の人になり昨日まで淋しかつた家庭は俄に春のやうな樂しい家庭になりました、心の持ちやう」つて嗚呼感謝しますとの禮狀に接したりと如何にニコ〳〵主義の貴きことよ

まだ見ぬ方ありや！

ニコ〳〵雜誌を！

心ある人の家庭には是非ニコ〳〵雜誌を備へざるべからず……

ニコ〳〵雜誌は一部たつた金五錢、市内は勿論全國到る處の書店により、一年分前金五十錢拂込の方を會員とす會則付見本郵券要五錢

東京京橋區南金六町十五番地（新橋際）

發行所　ニコ〳〵倶樂部

電話新橋三二八番　三二九番
振替口座東京一四九四八番

明治　年　月　日　印刷
明治三十四年　月　日　發行
明治三十四年　月　日　印刷
明治三十四年　月　日　發行

金五錢　一ヶ月分前金六十錢
郵便切手代金　錢

著作者　東京市麻布区笄町十六番地　長野元次郎
東京市麻布区笄町十六番地　松永敬太郎
發行人　東京市麻布区笄町一丁目七番地　松本魁
印刷人　東京市麻布区笄町十五番地　東長文社
印刷所　東京市麻布区笄町六町十五番地　ニコ〳〵倶樂部
發行所　電話新橋三二八、三二九　振替口座東京一四九四八番

大倉堂、東海堂、至誠堂、文明堂、北陸館、土田屋

040945-000-4

特28-581

金

牧野　元次郎／著

M44. 6

BDF-0044

268

39

特